

丹波佐吉の狛犬再記載 — 八滝・五社神社

磯 辺 ゆ う

奈良文化女子 短期大学

Redescription of the Stone Komainu Made by Sakichi of Tanba : Yataki — Gosha

Yu Isobe

Narabunka Women's college

幕末期の名人石工丹波佐吉の新たに発見された狛犬を再記載し、その全体の様式、石材等について他の佐吉狛犬と比較、検討する。様式上、本狛犬は第Ⅳ期の最初のものとなる。しかし、奉納時期からは、第Ⅲ期最後のS11柏原・八幡の前に位置する。あわせてこの狛犬の制作状況について考察する。

キーワード：石造狛犬、丹波佐吉、江戸時代、奈良県榛原市、八滝・五社神社

1. はじめに

江戸時代後半、燈籠などの石造物が、庶民の手で神社仏閣に多く奉納されるようになり、畿内では大坂の石屋の集住区を中心に石造物産業は大いに発展した^{1)、2)}。多くの場合、石工名が記されていないために、作者を特定することは難しい。ただ幕末期の名人石工として名高い丹波佐吉は、ある時期から自作に記銘しているため、その作品がかなり知られている^{3)、4)、5)}。また、人物についても同時代人による記録が残されているため、比較的知られている^{3)、6)}。筆者は、佐吉の石造物について再あるいは新記載し、その一生とともに、制作の背景や意図を考察してきた^{7)、8)、9)、10)}。こうして現在までのところ、佐吉の狛犬は17件が知られるに至っている。ところが、「大和の石仏会」前会長西田榮治氏から頂いた自作資料¹¹⁾中に、丹波佐吉の別な狛犬が示されていることを知った。奈良県榛原市五社神社(資料中では五所神社と記載されている)狛犬の写真である。その狛犬は、佐吉のものとして今まで知られておらず、氏によって発見されたものである。佐吉狛犬全体と照らし合わせるために、ここに再記載を行い、新たな考察を加えるものとする。

狛犬番号は、先の論文¹⁰⁾で追加したS17(S5-S6)醍醐・春日神社と同様、続き番号S18に、その奉納時期がわかるよう、前後の狛犬番号(S10-S11)を付け加えたものとした。基本的な方法及び型の名称・記号は磯辺^{7)、8)}、磯辺・小寺¹⁰⁾と同じである。

2. 記 載

S18 (S10-S11) 八滝・五社神社 (萬延改元庚申歳1860、照信花押、阿：宇陀 細川治助利嵩花押、
 幹旋人村中、吽：宇陀 細川治助方嵩花押、幹旋人村中)。

奈良県榛原市榛原区八滝。西田榮治 2009¹¹⁾。図1、図2、表1、表2。

中型。体高／体長低め。体高／胸幅低めでずんぐりしている。胸よりも頭部が前に出ている。阿吽とも斜めこちら向き、雌雄なし。吽の角ほとんど不明。州浜四方から脚が見える。州浜の枠線四角、台座・基壇に枠線なし。耳の毛長く顎付近まで流れる。鬣阿吽とも後向き。目と鼻先短い。顎鬚長。犬歯1対。胸紋、菊紋なし。尾：ヤツデの葉型、後面中央に複数の渦が一行半円状に並ぶ、尾の付け根は貫通せず、尾の前面に小渦あり。尾毛束数、阿：上向き直毛束5、後面中央渦5、尾の前面小渦左右各3、吽：上向き直毛束4、後面中央渦4、尾の前面小渦右4、左2。背骨不明瞭、かすかな盛り上がりを感じられる程度、その数、阿：1、吽：2。後足後方に向かって毛が流れ、先に渦なし。後ろ足間の窪め仕上げ良好。前足付け根：阿吽とも高さはほとんど左右同じながらやや手前側（拝観者）ひく、つま先位置やや手前側ひく。

狛犬：花崗岩、台座Y型：土地の赤石、基壇b型：上のb1石は赤石、下の土台石は花崗岩。



①阿－横



②阿－前



③阿－尾



④吽－横



⑤吽－前



⑥吽－尾

図1 S18 (S10-S11) 八滝・五社神社狛犬1

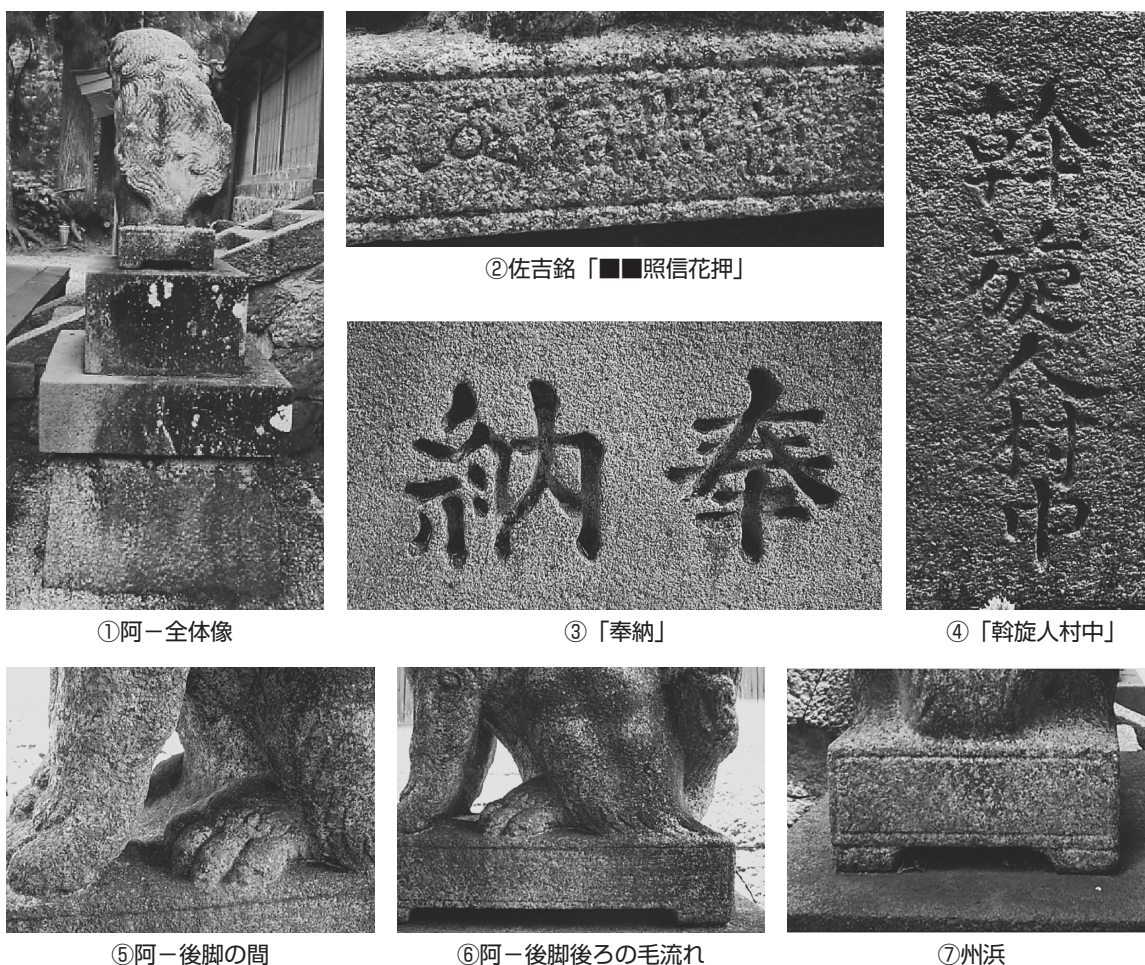


図2 S18 (S10-S11) 八滝・五社神社狛犬2

3. 考 察

佐吉の銘である「照信花押」(図2-②)があり、狛犬そのものは佐吉の様式である。奉納時期は、奈良県天理市S10永原・御霊神社と兵庫県柏原市S11柏原・八幡神社の間である。以下にいくつかの特徴について、他の佐吉狛犬と比較する。

3.1 狛犬の時期と様式

この狛犬が奉納されたのは、「萬延改元庚申歳」とあり、万延元年(1860)で、奉納月が記されていない。同年奉納の第Ⅲ期S10永原・御霊の場合、阿は「安政七年三月」、吽は「万延元年三月」となっており、3月の改元の、ちょうどその時にあたっていたことがわかる。S10永原・御霊の記述と比べて、八滝・五所はその後の、改元月からそれほど遅くない頃と推測される。次の狛犬である第Ⅲ期最後のS11柏原・八幡は翌年(文久元年1861)5月の奉納なので、八滝・五所の番号はS18(S10-S11)となるわけである。

時期としては第Ⅲ期(安政6年1859 4月-文久元年1861 5月)の中に含まれていることになる。し

かし、S18 (S10-S11) 八滝・五所神社狛犬は、第Ⅲ期の特徴である縦長な体型及び炎あるいは流れ毛スタイルの尾を持たず、ずんぐりして、尾の後面に一列半円形に配列された渦を持つ (図1-③、⑥)。この特徴は明瞭に第Ⅳ期のものである。

表1 狛犬の大きさ (阿像 単位cm)

期	狛犬番号と神社		狛犬						尾	
			全長	体長	体高	胸幅	体高/体長	体高/胸幅	縦	縦/横
第Ⅰ期	S1	平井・八王子神社	37	30	46	21	1.5	2.2	27	1.5
	S2	丹生川上神社	63	54	65	33	1.2	2.0	53	1.6
第Ⅱ期	S3	神楽岡神社	74	66	76	35	1.2	2.2	47	1.5
	S4	宇太水分神社	80	64	81	40	1.3	2.0	54	1.3
	S5	久米御縣神社	70	53	72	35	1.4	2.1	51	1.7
	S17 (S5-S6)	醍醐・春日神社	70	56	71	34	1.3	2.1	46	1.3
		興留・素戔鳴神社	72	62	83	34	1.3	2.4	55	1.2
	S7	藤森・十二社	66	60	69	28	1.1	2.5	47	1.5
第Ⅲ期	S8	伴堂・杵築神社	73	69	93	36	1.4	2.6	65	1.8
	S9	下永・八幡神社	75	65	89	38	1.4	2.4	58	1.5
	S10	永原・御霊神社	64	59	75	31	1.3	2.4	64	2.7
第Ⅳ期	S18 (S10-S11)	八滝・五社神社	64	56	66	30	1.2	2.2	45	1.3
第Ⅲ期	S11	柏原・八幡神社	64	52	71	30	1.4	2.4	33	0.8
第Ⅳ期	S12	沢・白山神社	64	52	64	30	1.2	2.1	42	1.3
	S13	岸和田・兵主神社	75	69	85	35	1.2	2.4	56	1.4
	S14	神岳神社	60	54	65	31	1.2	2.1	44	1.3
	S15	阿波神社	52	44	60	25	1.4	2.3	35	1.1
第Ⅴ期	S16	園部・摩気神社	73	62	73	32	1.2	2.3	45	1.6
その他	U	牟佐坐神社	77	69	87	38	1.3	2.3	70	1.7
	K	三井神社	63	57	69	34	1.2	2.1	45	1.4

注1 全長：鼻から尾の後端まで、体長：鼻から胴または後足の後端まで、体高：前脚下端から頭上端まで、胸幅：胸の最大幅。

注2 S7とS13は平成に再建されたもの。以下表2、3も同様。

注3 磯辺¹⁰⁾表1にS18 (S10-S11)を付加、修正。「その他」は佐吉以外の石工による。

表2 佐吉狛犬の特徴

狛犬番号	期	尾	体高	体高/胸幅	顔向き	目鼻間	顎鬚	鬣流れ方向		耳	胸のすじ	犬歯	胸紋	背骨紋	後足後方渦
								阿	吽						
S1	I	O	46	2.2	斜めこちら向き	長		前	前	平	無	1	無		
S2			前	前											
S3	II	Y	77	2.2		中	短	前	前	無	有	2	阿	菊	0
S4			前	前											
S5			後	後		有	2	阿	吽	?	1				
S6			後	後											
S7			後	後		流れ	有	2	吽	?	1				
S8			後	後		流れ	有	2	菊	菊	0				
S9	後	後	流れ	有		2	菊	菊	0						
S10	後	後	流れ	有		2	菊	菊	0						
S18 (S10-S11)	IV	YU	66	2.2		短	長	後	後	無	有	1	無	丸	0
	S11	III	H	71				2.4	前						
S12	後	後	流れ	有		2	菊	菊	0						
S13	後	後	流れ	有		2	?	?	1						
S14	後	後	流れ	有		2	菊	菊	0						
S15	後	後	流れ	有		2	阿	吽	菊	0					
S16	V	O	73	2.7	阿吽正対	長	前	前	平	有	2	無	菊	2	

注1 尾の型 O:扇、Y:ヤツデ、H:炎流れ毛、YU:ヤツデ渦

注2 S8の背、脚等に多数の菊紋があるが、胸にはない。

注3 磯辺¹⁰⁾表2にS18 (S10-S11)を付加。各特徴の詳細は本文及び磯辺⁸⁾を参照。

注4 ?は平成作には無いが元来は不明。

狛犬のサイズ、体高／体長、体高／胸幅は、表1に示されているとおり、S12沢・白山、S14神岳に近い。尾の縦横比からみても、第Ⅲ期とは異なり、第Ⅳ期のものと同じ範疇に入る。

鬣の流れ方向（表2）については、最初の頂点に達したS6興留・素戔嗚までが阿吽共「前」、あるいは「前と後」向きであるのに対し、S7藤森・十二社からS18八滝・五社まで阿吽ともに後ろへ流れることになる。これは、ほぼ第Ⅲ期の特徴で、第Ⅳ期にもみられるものである。顔は、この頃のものらしく、若い時とは違って、耳が長くたれた第Ⅲ期の特徴を示している。

このように、この頃のものらしい特徴を備えながらも、佐吉狛犬の様式を分ける主な特徴である体型と尾の形式は、第Ⅲ期ではなく第Ⅳ期のものである。また体のひねりは、それほど明瞭ではない。全体の雰囲気は第Ⅳ期の二番目となるS12沢・白山に似ている。



図3-1 尾の形 第Ⅰ期から第Ⅲ期まで。⑧：吽、その他：阿。



図3-2 尾の形 第Ⅳ期から第Ⅴ期まで。⑬、⑭、⑮：吽、その他：阿。
S11柏原・八幡とS18(S10-S11)八滝・五社は期ごとにまとめるために、順を入れ替えた。

3.2 尾の形

狛犬を造るにあたって、尾の形は、佐吉が最も工夫した部分である。第Ⅰ期から第Ⅲ期までは尾の形の変化に全体としての流れがあることがわかる(図3-1)。S1平井・八王子からS4宇太水分までの間に、厚みのある尾は、平たく幅広いヤツデの葉型になっていく。同時に横の渦も小さくなっていき、塊になっていたのが、S4宇太水分に至って前後の2群に分かれるようになる(前の渦は大きさや形に変化はあるものの、基本的に図3-2-⑮に示したものと同様である。詳細は磯辺⁷⁾を参照)。ここで佐吉のヤツデの葉型の典型的なスタイルが確立したのである。そして、S6興留・素戔鳴まで微妙な変化はあるものの、そのスタイルを踏襲している。次のS7藤森・十二社では、平成の再刻なので、詳細はわからないが、全体としてその後の方向性を探っている気配が表れている。つまり、尾の先の直毛束は5であるが、ヤツデのように横に展開しない。やや厚みがあり、次の第Ⅲ期の炎型につながっていくものをかすかに感じさせる。このように、第Ⅰ期から第Ⅲ期までは、3期に分けてあるものの、移行期があるのが特徴である。

一方、第Ⅳ期に向かっては移行期がなく、突然第Ⅲ期のS10永原・御霊とS11柏原・八幡の間に出現するのである。この第Ⅳ期では、小さな変化はあるが、ヤツデの葉中央に半円状の渦群のあるスタイルが特徴である(図3-2)。そして、第Ⅴ期の洗練されたS16園部・摩気が、やはり突如出現して終わる。

こうした流れから、佐吉の心の中で、第Ⅰ期から第Ⅲ期までは、同じ向上心の流れの中にあるとみられるが、第Ⅳ期以降は、違った考えのもとにいるとみて良いだろう。それは、磯辺⁹⁾で考察した通りである。ここでは、その第Ⅳ期が第Ⅲ期の途中から始まっていることが明らかになったのである。

3.3 「奉納」の文字と彫り

狛犬台座に記される「奉献」「奉納」の文字は、石工の手になる場合が多く、特に佐吉はこの文字に特徴が表れている^{7)、8)}。佐吉狛犬では、今回のS18(S10-S11)八滝・五社と最後のS16園部・摩気で「奉納」となっている以外、すべて「奉献」である^{7)、10)}。まずこの点でS18(S10-S11)八滝・五社は特異である。続いて、以下に「奉」を検討する。

台座石と「奉」の双方の大きさを比べて見ると、S18(S10-S11)八滝・五社とその他で違いが明瞭である(図4)。「奉」の上下は、S18(S10-S11)八滝・五社では余白が多い(図4-②)。図4には、比較のために佐吉の初期のS1平井・八王子からS3神楽岡と、S18(S10-S11)八滝・五社の前後のS10永原・御霊とS11柏原・八幡を示した。S11柏原・八幡だけが、他の書家に書いてもらった書で、他は佐吉の文字とみて良い^{7)、8)}。いずれの場合も、台座石の上下の辺いっばいに刻んでいる。S18(S10-S11)八滝・五社のように大きな石に小さな文字を刻んだ例はない。佐吉の場合、石にいっばいに描いているのは、石を見て大きさを測って文字を書いていることになる。S11柏原・八幡場合、書家に石の大きさを伝えて、それにあった大きさの文字を書いてもらったのに違いない。

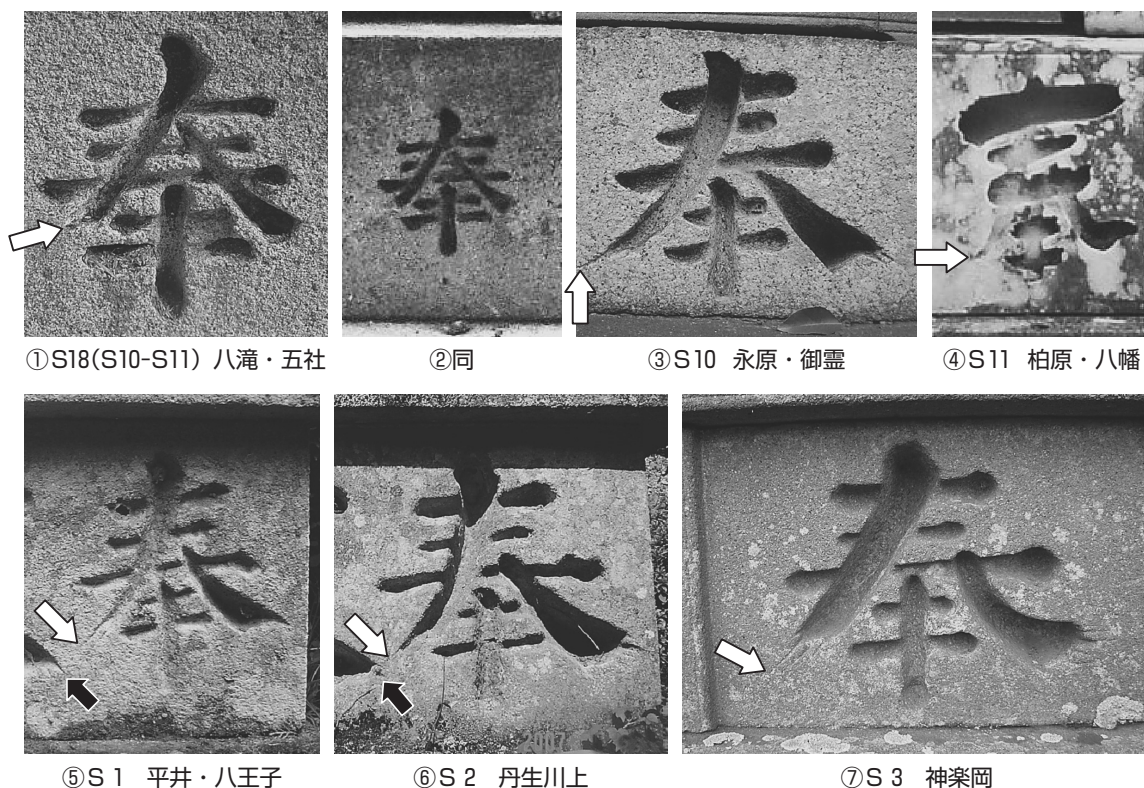


図4 「奉」の文字。②～⑦は、台座石の上下辺を含む写真である。①は②を拡大したもの。
白矢印は左払い先端を、黒矢印は隣の「献」の右払い先端を示している。

佐吉の典型的な「奉」の形は、左右ともに払いが長く、その先が三番目の横棒よりもかなり横に出ているので、幅が広い(図4-③、⑦)。この形はS3神楽岡で確立され、佐吉の文字の大きな特徴となる。特にS3神楽岡以降は、阿吽に「奉」と「献」を別々に一文字ずつ彫っている。それは幅広く雄大に彫

れるからであろう。「奉納」よりも「奉獻」を好んだのは、「獻」の方が横に払いがあり、広がりのある文字とすることができるからと考えられる。「納」はその点おとなしいが、画数が少なく彫りやすいに違いない。ちなみに「獻」は常に、旧字体「獻」である。最後にS16園部・摩気で「奉納」になった⁷⁾のは、州浜に彫るために小さな文字になったので、画数の少ない方を選んだと思われる。

佐吉が「奉獻」の文字を確立する前のS1平井・八王子とS2丹生川上では、横棒に対し左払い先端は、ぎりぎりかやや短めで、文字の幅が狭い(図4-⑤、⑥)。これは、台座1石いっばいに「奉獻」の二文字を彫っているからである。図4-⑤、⑥では、「奉」左払いのすぐ横に「獻」の右払いが見えている。横の文字との関係から先を伸ばすわけにできなかったようだが、実はこのような幅の狭い「奉」の文字は他の石工による多くの狛犬で見ることができる一般的な字体である。佐吉は、最初、本来よくある字体で書いていたのが、S3神楽岡に至って、雄大な文字に到達したとみて良い。それに対し、S18(S10-S11)八滝・五社の場合、1石に「奉納」としているもので、幅が狭いのは当然と見えるが、それでも横の「納」との間にも十分余裕がある(図2-③)。これは佐吉と異なる点である。

また、佐吉が最も深く彫る部分(書く時最も力を入れている部分)は、右払いである。一方、S18(S10-S11)八滝・五社では、最深部は右払いではなく、左払い最上部にあり、これは佐吉の「奉」では他に見られない特徴である。なお、佐吉自身の文字ではないS11柏原・八幡では、第一番目の横棒が最も深い(図4-④)。

「奉」の縦の長さとの彫りの深さ(最も深い部分)の関係を、佐吉狛犬全体及び斑鳩町内の江戸時代狛犬全体(佐吉以外)と比べてみる

と、S18(S10-S11)八滝・五社の彫りが、第Ⅲ期ではなく、佐吉の第Ⅰ、第Ⅳ期および他の石工(斑鳩町)による彫りと同列であることがわかる(図5)。第Ⅳ期の場合、S12沢・白山とS14神岳は地元の石工が彫ったと考えられ、S13兵主ではその字体が他と異なるために、彫りが浅い^{8)、10)}。S18(S10-S11)八滝・五社は、そのようなグループにほぼ一致するのである。

上記の特徴から、S18(S10-S11)八滝・五社の台座の文字は、書・彫りともに佐吉以外の手になるものと考えられる。

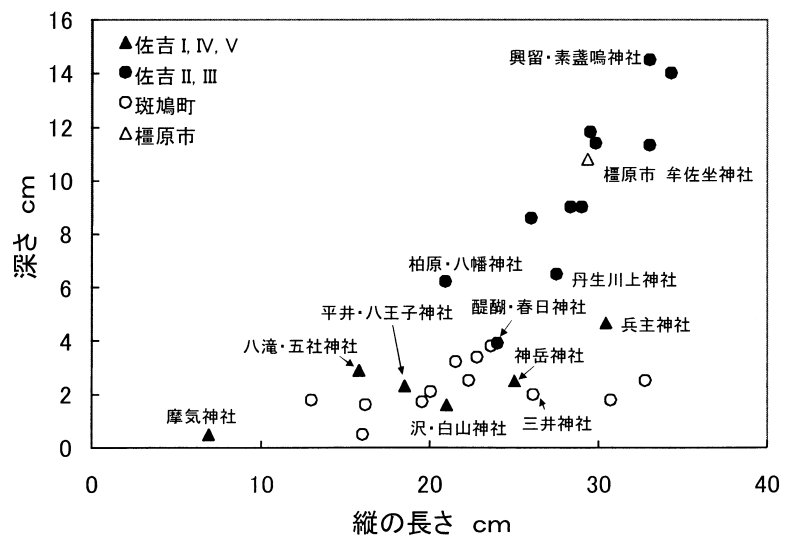


図5 「奉」の縦の長さに対する彫りの深さ
磯辺・小寺¹⁰⁾ 図3に追加。

3.4 州浜の形と枠線、台座、基壇、石材

S18(S10-S11)八滝・五社の州浜の形・枠線、台座、基壇の形は、佐吉の代表的な形-C・Yb型である(図2-①、⑦、表3)。しかし、表3に示したように石材に大きな違いがある。佐吉が明ら

かに宇陀で造ったと思われる狛犬（S1平井・八王子～S5久米御懸）は現地でもとれる石で造っているが、S17（S5-S6）醍醐・春日のために宇陀の山を降りてからは、よく流通している砂岩と花崗岩を使って狛犬を造っている¹⁰。特にS6興留・素戔嗚以降、少なくともS11柏原・八幡までは、佐吉は大坂で狛犬に精進していたと考えられる。そのような中で、S18（S10-S11）八滝・五社において、台座に宇陀特有の赤石を使っているのは特異である。基壇の石は、上部の平たい石（b1）が赤石で、下の台形なのが花崗岩できている（基壇の形については磯辺・小寺¹⁰参照）。神社境内の様子を見ると、この赤石がよく使われている。狛犬横にある境内社（図6）も狛犬同様に、基壇に赤石（図6 b-1）と花崗岩を使っており、この地方の特徴と見ることができる。「奉納」の文字とあわせ、狛犬は佐吉が造ったが、台座以下をこの地方の石工が造ったものとするのが妥当である。



図6 八滝・五社神社狛犬横の境内社。b1とその下の土台の石材が異なる。

表3 佐吉狛犬及び参考狛犬の州浜、台座、基壇の特徴

狛犬番号	期	州浜		台座		基壇		石材		
		型	模様	型	枠線	型	作者	狛犬・州浜	台座	基壇
S1	I	A		X	-	a		土地の石	土地の石	土地の石
S2		B		X	-	-		赤石	赤石	赤石
S3		C		X'	◎	b		赤石	赤石	赤石
S4		C		X'	◎	b		赤石	赤石	赤石
S5	II	C		Y	○	b		赤石	赤石	赤石
S17 (S5-S6)		D		Y	-	c1	龍田石工	砂岩	花崗岩	花崗岩
S6		C		Y	-	c2		砂岩	花崗岩	花崗岩
S7		不明		Y	-	b		不明	花崗岩	花崗岩
S8	III	C	4面模様つき	Y	○	b		砂岩	花崗岩	花崗岩
S9		C		Y	-	b		砂岩	花崗岩	花崗岩
S10		C		Y	-	b		砂岩	花崗岩	花崗岩
S18 (S10-S11)		IV	C		Y	-	b	他	花崗岩	赤石
S11	III	C		Z	○	b	柏原石工	砂岩	砂岩	花崗岩
S12		C		Y	-	d	他	砂岩	花崗岩	花崗岩
S13		IV	不明		Y	○	b	他	不明	花崗岩
S14	IV	C		Y	-	d	他	砂岩	花崗岩	花崗岩
S15		C		Y	-	b	他	砂岩	砂岩	花崗岩
S16	V	B	前後模様つき	Y	-	a		土地の石	土地の石	土地の石
U		足つき	側面模様つき	Y	-	c1	他	砂岩	花崗岩	花崗岩
K		足なし		Y	-	c2	他	砂岩	花崗岩	花崗岩

注1 枠線 ○：あり、◎：多くあり、-：なし。

注2 c1、c2の数字は段数。

注3 磯辺・小寺¹⁰表3にS18(S10-S11)を付加し、平成再建のS7、S13の石材を不明と訂正。（型の詳細は磯辺・小寺¹⁰参照。）

なお、狛犬自体が花崗岩できているのも、佐吉の場合珍しい（表3）。江戸時代の他の石工の手になる場合、花崗岩製の狛犬はよくある。しかし、佐吉においてはそのようなことはない。狛犬そのものは、確かに佐吉が作ったと考えられるので、よほど急いでいて、石の手配が間に合わなかったのではないかと推測される。

3.5 奉納事情

時期的には、大和の狛犬を続けて制作しており、この時期の集大成といふべきS11柏原・八幡に向かう直前である。当時佐吉は大坂で仕事をしており、上に考察したように、狛犬だけを造って、台座と基壇は地元の石工の仕事にまかせたようである。S11柏原・八幡のための新たな狛犬の構想は、S9下永・八幡において、ほぼできあがっていた(図3-1-⑩)。S10永原・御霊では既に、急いでいた気配が感じられる⁸⁾。S10永原・御霊を奉納したのは万延元年(1860)3月のことである。S18(S10-S11)八滝・五社を奉納したのは、同年(月不明)、恐らくS10永原・御霊の後に、大いに急いで造ったのではないだろうか。その後が続いて来るS11柏原・八幡は、故郷の神社であり、大変世話になった上山孝之進の依頼である^{3)、6)、9)}。そのために他にない狛犬を目指して、力の限りをつくしてようやくとりかかろうとしている時である。しかも、孝之進は同年11月8日に70歳で亡くなるのである^{3)、9)}。万延元年(1860)の初め頃に、すでに健康を害しているようであったなら、なお佐吉としては急ぎたいところである。

そのような状況のもとに、重ねて狛犬の依頼があり、どうしても断れなかったのではないだろうか。そこで、まず狛犬だけを造ることにして、基壇以下は地元の石工に任せる。石もその時手近にあった花崗岩を用いる。全体の形は、造り慣れた第Ⅱ期の形とする。犬歯1対、菊紋なし、背骨もほとんど不明瞭なぐらいの造りと全体に簡略化する。しかし、全体の造形は、この時期の狛犬らしく、鬣は後へ、顎鬚長く目鼻間の短いものとなっている。ただ、新たな工夫を加えることは怠らず、ヤツデの葉型の尾の中央に、半円形に渦を配置した。この、たぶん佐吉にとって造りやすい形は、S11柏原・八幡が終わってから、気軽に造るスタイルとして踏襲されることになる。

ここまで断れなかった理由は、奉納者にあるだろう。奉納したのは、宇陀の細川治助親子である。細川家は宇陀松山の上町に店を構える豪商である。一代治助が文化3年(1806)にここで薬種商を始め¹²⁾、後に大いに栄えた。そして、二代細川治助方嵩は、安政5年(1858)9月に苗字(三代の間)帯刀(一代限り)を許された。奉納者は、細川治助利嵩(阿)と細川治助方嵩(咩)の二人の名前になっているが、奉納の実行者は二代目と考えられる。阿の利嵩は父である一代目であろう。三代の間許された苗字は、二代目からではなく一代目からとしたようである。通常は大和屋治助と称し、また静壽堂とも号した¹²⁾。

佐吉が宇陀に入って、大師山四国八十八か所霊場建設という大仕事に取り組み始めたのは嘉永5年(1852)のことである(表4)。大雨・洪水に見舞われながらも、秋以降着々と仕事は進んで行った。翌嘉永6年(1853)6月3日ペリー来航の後、幕府は江戸防衛のために台場建設他を急ぎ、そのための費用を幕府御用金として各地に求めた。二代細川治助は嘉永7年(安政元年1854)8月に500両を、さらに安政4年(1857)7月100両を上納したことによって、安政5年(1858)9月名字帯刀を許されることになったのである。狛犬奉納(万延元年1860)の2年前のことである。なお、幕府御用金は、大坂町人に対しても賦課されたが、この嘉永6年以後も幕末の動乱に際して、さらに続けて賦課されている¹⁾。佐吉は、宇陀にいる頃に、この二代目に大いに世話になったのに違いない。嘉永6年、7年は宇陀地方では、多種の大きな天災にみまわれていた¹³⁾(表4)。佐吉の周辺も多事多難である。その中でも、大師山の事業は続けられ、無事に完了したのが、嘉永7年である。大和屋治助が幕府に500両の上納金を納めたのは、まさにそのような時であり、宇陀では、夏中地震に揺られていた頃である。また細川家の

薬を大坂道修町で取り扱っていたのが、近江屋彦兵衛である¹²⁾。この人は佐吉三番目の狛犬を、嘉永7年4月に宇陀松山の神楽岡神社に奉納している。いずれも佐吉の宇陀時代のことである(表4)。なお、八滝は、宇陀松山からは東北東の方角にあたり、佐吉が働いていた大師山近傍である。奉納を斡旋したのは、村の人々であるが、細川家が八滝の神社に奉納している理由は不明である。

宇陀松山の細川家の屋敷は幕末期のもので¹⁴⁾、現在、「薬の館」として保存されている。なお、細川家では、狛犬奉納の6年後、慶応2年(1866)、後の藤沢薬品を起こすことになる友吉が、この屋敷で二代治助の孫(嫁いだ次女の子)として生まれている¹²⁾。

こうして、五社神社の狛犬は、第Ⅳ期の先駆けとなった。

表4 佐吉宇陀時代の主なできごと

嘉永5(1852)	7月21日 9月2日 9月	佐吉：宇陀入り (美登路家で世話になりながらチームで霊場建設開始) 大風雨・洪水 佐吉：S1平井・八王子神社狛犬 佐吉：大師山45番総供養塔(以下大師山関係略)
嘉永6(1853)	6月3日 夏 11月	ペリー来航。以後幕府台場建設急ぐ。 歴史に残る大干ばつ 佐吉：S2丹生川上神社狛犬
嘉永7(1854)	3月3日 4月 4月 6月 6月15日 8月 9月 9月 11月4日 11月5日	ペリー再来し、日米和親条約締結 佐吉：S3神楽岡神社狛犬 美登路家当主忠治郎死去 佐吉：大師山四国八十八か所霊場道標 (霊場の完成とチームの解散。佐吉はひとり残る。) 伊賀上野地震。以後9月中旬まで揺れ続ける。 大和屋治助500両を江戸湾台場建設他のために上納 佐吉：S4宇太水分神社狛犬 佐吉：宇太水分神社永世燈 安政東海地震 安政南海地震。大坂も津波被害大。
安政改元	11月27日	
安政2(1855)	2月 4月 5月 11月 11月	佐吉：大師山入り口永世燈 佐吉：法正寺地蔵 佐吉：宇太水分神社常夜燈 佐吉：S5久米御懸神社狛犬 佐吉：神楽岡神社常夜燈
安政3(1856)	正月	佐吉：大師山45番前標識 佐吉：丹波へ帰郷

謝辞

資料をお送り頂いた「大和の石仏会」前会長西田榮治氏に深謝の意を表します。

引用文献

- 1) 新修大阪市史編纂委員会編(1990) 新修大阪市史 第四巻. 1058+39pp. 大阪市.
- 2) 小寺慶昭(2003) 大阪狛犬の謎. 276pp. ナカニシヤ出版.
- 3) 金森敦子(1988) 旅の石工—丹波佐吉の生涯. 274pp. 法政大学出版局.
- 4) 奈良文化財同好会(1999) 狛犬の研究—大阪府の狛犬—. 165pp. 奈良文化財同好会.
- 5) 小寺慶昭(1999) 京都狛犬巡り. 250pp. ナカニシヤ出版.
- 6) 上山家文書. 丹波市教育委員会蔵.
- 7) 磯辺ゆう(2007) 丹波佐吉の狛犬1—記載. 奈良文化女子短期大学紀要38: 19-30.
- 8) 磯辺ゆう(2007) 丹波佐吉の狛犬2—考察. 奈良文化女子短期大学紀要38: 31-42.
- 9) 磯辺ゆう(2008) 丹波佐吉の石造物とその一生. 奈良文化女子短期大学紀要39: 1-38.
- 10) 磯辺ゆう・小寺慶昭(2009) 丹波佐吉の新発見狛犬—醍醐・春日神社. 奈良文化女子短期大学紀要40: 29-39.
- 11) 西田榮治(2009) 石工 丹波佐吉の遺品～続大和での活躍～. 24pp. 自作資料.
- 12) 榛原市大宇陀区松山地区「葉の館」展示資料.
- 13) 菟田野町史編纂委員会著(1968) 菟田野町史. 1300pp. 菟田野町役場.
- 14) 土井実・池田源太・池田末則編(1959発行 1987復刻) 大宇陀町史. 850pp. 臨川書店.